

〔翻訳〕

メランヒトン『神学要覧』（1559年）—その7— （Loci praecipui theologici.1559） 翻訳

菱刈晃夫

前号に引き続き、今回は「聖霊について」以降の試訳である。これでロキ(主題)1「神について」が終了する。

(SA Bd. II-1. S.228-240)

* * *

聖霊について

De Spiritu sancto

霊〔聖霊〕(Spiritus)という名称は一般的に活動、あるいは自然、あるいは活動する力を意味し、預言者や使徒による書物自体の中での多様性が注目されねばならないし、そこで聖霊〔という名称〕が見いだされるすべての言説が、無分別に混合されてはならない。それはしばしば風、しばしば人間の生、しばしば人間によって作りだされた運動や衝動を意味し、ある時は善、ある時は悪である。これは霊的な存在を意味する。つまり生きた、知性的な、非身体的な、作用するものである。「神は霊である」(ヨハ四・二四)。この箇所では父と他の位格に共通の名称となっている。それゆえに証言を集める中で〔私たちは〕選択に引き込まされざるをえず、聖書が聖霊について元来どこで語っているのか、賢明に判断されねばならない。キリストによって与えられた福音は聖霊を告知していて、それは私たちの心を聖化し生かすためにあり、これを教会は神的で、生き生きとした聖化する位格であると認識する。そういうわけで聖霊は位格であると確言されねばならない。なぜなら多くの不敬虔で無謀な人々が教会の対立の中で聖霊は位格ではなく、人間の中につくりだされた活動を単に意味するとか、他の位格なしに父自身の力や活動をいづれにせよ意味しているとか主張したからである。

しかし、こうした不敬虔な詭弁に対して教会は聖書に伝えられている真の証言

を対立させる。その最初にしてもっとも明らかなのは神性の啓示であり、キリストの洗礼において生じたもので、そこで三つの位格が明瞭に区別される。父は言う。「これは私の愛する子」(マタ三・一七)。したがって、ひとつは父という位格があり、他に子という位格がある。しかし聖霊が鳩の形で降りてくる。さらにもし聖霊が心の中のつくられた活動であるなら、身体的な特有の形で現れることはないであろう。あるいは父自身であるなら、聖霊を区別することはないであろう。しかし彼はこう言う。「霊が降って、ある人にとどまるのを見たら」〔その上にあなたは聖霊を見る〕(ヨハ一・三三)。

このようにペンテコステ〔聖霊降臨日〕には聖霊は身体的な特有な形で現れる。こうした啓示は根拠なく生じているのではなく、それどころか神による傑出した好意によるものであり、その中で神は自身を教会に明らかにし、聖霊が位格であることを立証したのである。

この立証に洗礼に関する言説が付加される。私はあなたに父と子と聖霊の御名において洗礼を授ける(マタ二八・二九)。つまり、あなたは神から受け入れられていることを証言する。私は神をあなたの上に、父、子そして聖霊を呼びだす。ところで聖霊に祈りが向けられているので、いわば父と子に対して、必然的に聖霊は位格であり、人間の中で作りだされた運動や活動ではないことになる。なぜならキリストが人間の中で作りだされた運動や活動を願い求めるのを教えることは決してないからである。したがって聖霊に対して父と子と等しく祈りは向けられているのであり、この意味は聖霊が位格であるだけでなく、全能であり、私たちの言うことを聞き届けてくれ、そして救ってくれるということを教えている。すなわちこれらはすべて祈りに含まれていて、それらは等しい榮譽を父と子と聖霊に帰する。したがって聖霊は第三の位格であり、父と子とは区別される。前に述べたように、これは父と子から生じて、福音の声によって再生させられた心に送られているからである。結果として彼らは新しい光によって神を認識して願い求め、信仰によって慰めを受ける間、彼らの中で永遠の生が開始される。

ヨハネによる福音書一四章(ヨハ一四・一六)。「私は父にお願いしよう。父はもうひとりの弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてください」。彼が、もうひとりの、と言うとき、この擁護者〔聖霊〕を彼は父と子から区別している。したがって霊は活動する父自身を意味しているのではない。すなわち他のものではない。決してつくられた活動を意味しているのでもない。なぜなら、もし活動する父もしくは父によってつくられた単なる活動であるなら、子から送られたのでもないからである。しかしキリストはヨハネによる福音書一五章で述べる(ヨハ一五・二六)。「私が父のもとからあなたがたに遣わそうとしている弁護者、すなわち、父のもとから出る真理の霊が来るとき」、自身に関して聖霊が送られていることを述べている。したがって聖霊は活動する父でも父に

よってつくられた単なる活動でもない。

この位格は固有のものである。もうひとりの弁護者〔聖霊〕は、「勝手に語るのではなく、聞いたことを語り」（ヨハ一六・一三）。もし霊がつくられた活動を意味するのであれば、父と子から聞いて受け取る他の教師がない、という教えになるであろう。

このようにパウロはコリントの信徒への手紙一の一二章で聖霊をつくられた賜物から、作者を作用〔の結果〕から明瞭に区別している。こう述べて、「これらすべてのことは、同じ一つの霊の働きであって」（一コリ一・一一）。

同じようにローマの信徒への手紙八章（ロマ八・一六）では、「この霊こそが、私たちが神の子どもであることを、私たちの霊と一緒に証してください」。ここで同じく彼〔パウロ〕は、活動し慰める聖霊を、それによって心が鼓舞され蘇生させられる慰めから区別している。

同じようにコリントの信徒への手紙二の三章（二コリ三・一八）では、「私たちは皆、……主と同じかたちに変えられていきます。これは主の霊の働きによるのです」。そこでまた作用の結果を光によって私たちの中につくられたものから区別していて、そこで述べているように、つまり、明瞭で堅固な知から、つまり、確かな信仰と祈りから区別している。

同じ箇所では、明白に霊は主である、つまり、神である、と述べている。なぜなら、「主は霊である」と言うとき、章節は霊という名称の箇所と主体の知性に帰するからである。バシレイオスはそのように同じ箇所を引用している¹。

さらに神の子が肉をとる前に、聖霊があったということは、預言者について述べているとき、はっきりとペトロが証言している。「自分たちの内におられるキリストの霊が、キリストの苦難とそれに続く栄光についてあらかじめ証した際」（一ペト一・一一）。ここでは明瞭にキリストの霊と呼ばれていて、これは預言者の中にあつた。したがって同じ聖霊によって父と使徒と続いて敬虔な人々が、つまり、すべての選ばれた者たちがすべてのときに聖化されたのである。

それはさらに明瞭にイザヤ書五九章の言葉が教えている。「これが彼らと結ぶ私の契約である —— 主は言われる。あなたの上にある私の霊。あなたの口に置いた私の言葉は、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、その子孫の子孫の口からも、今より、とこしえに離れることはない —— 主は言われる」（イザ五九・二一）。同じ霊がイザヤ書でもすべての教会でもすべてこよなく永遠に、と彼は言う。したがってキリストの復活の後に聖人の胸〔心〕に聖霊が注ぎ込まれたのではなく、常に同じ聖霊によってすべての選ばれた者たちが聖化された。確

*1 『聖大バシレイオスの『聖霊論』』 山村敬訳、南窓社、一九九六年、一三九—一四一頁、参照。

かにイザヤによる言説は、もっとも甘美な教えと慰めを提供している。これは神の教会が永久であり、福音の声が鳴り響くところでは不変であり、その声と共に聖霊は効力を発揮していると断言している。そしてゼカリア書七章ではこう言われている。「万軍の主がその霊により、先の預言者たちを通して送られた律法と言葉を」(ゼカ七・一二)。この言説によってさらに二つのことが断言されている。聖霊によって預言者たちが支配されていることと、神の言葉が空虚な音ではなく、聖霊はそこに居合わして、その声によって精神を動かし駆り立てて〔鼓舞して〕いるということである。このことは敬虔な人々においてもっとも堅固に定められ〔決心され〕ねばならない。これによって信じる者の精神において神がその言葉を通じてまさに働いており、この中で永遠の生命を駆り立ててくれているのを知るためである。ガラテアの信徒への手紙三章でこう言われているように、「私たちが、約束された霊を信仰によって受けるためでした」(ガラ三・一四)。「これについては」後に再び述べようと思う。

このようにイザヤは六三章で聖霊がモーセと砂漠の人々の指導者であり支配者であると断言している(イザ六三・一一)。この言説によって彼は常に聖霊が神の教会の中にあることを表している。こうキリストは明らかにヨハネによる福音書一四章で述べている。「父はもうひとりの弁護者を遣わして、永遠にあなたがたと一緒にいるようにしてくださる。この方は、真理の霊である」(ヨハ一四・一六)。イザヤの言葉はこうである。「どこにおられるのか、羊の群れを飼う者と共に、彼らを海から連れ出した方は。どこにおられるのか、彼の上に聖なる霊を置いた方は。誉れある御腕をモーセの右に進ませ、彼らの前で海を分け、とこしえの名声を得られた方は」(イザ六三・一一以下)。次いでこう加える。「主の霊は彼らの指導者となった」(イザ六三・一四参照)。

この言説は聖霊に関する教えが教会において父祖たちや預言者たちにとって確かであったことを明示している。それゆえに古代の人々も聖霊に関するこの言説を創世記の中で理解したのであり、それは神性が位格であるということである。

「神の霊が水の面を動いていた」(創一・二)。すなわちバシレイオスはこう述べている。あるいは、さらに真実であって、私たちの前にあったものから説明されることは、神の聖霊について語られている。なぜなら聖書はここで述べるように神の霊を見るからであり、聖霊を理解するからである。これは神的な三性の第三の位格である。さらにもしこのようにモーセの言説を理解するなら、あなたはより多くの益を得ることになるだろう。というのも、どのようにして霊は水の上に運ばれたのであろうか。私はあなたにあるシリア人の話を語ろう。こう述べている。ここに置かれた語によって、熱によって生命を温めるのと同じもの、ちょうど寝た鳥が卵を温めているように。ここまでがバシレイオスである。しかし新約聖書から引かれた証言がより明瞭である。しかしながら創世記におけるこの言説

をどのような仕方であなたが説明するにしても、それでも教会は聖霊によって動かされていることを意味している。これによって教会は、その光と祈りの中で温められ〔育まれ〕教えられ照らされている。このことはもっとも堅固な信仰によって保たれねばならない。使徒行伝二章で語られているように、キリストは父の右に座し、霊を注ぐ(二・三三)。同じく次のようなことが言説の中で伝えられている。高い所に昇るとき、人々に贈り物を分け与えられた(エフェ四・八)。したがってこのことを信じることで〔この信仰によって〕私たちは、神の子がわれわれをその聖霊によって導いてくれるように祈るとしよう。

私は聖霊が位格であることを立証する証言を列挙〔検討〕した。これに私はあのヨハネの手紙一の五章を加えよう(一ヨハ五・七)。「天において証言しているのは三つあり、父、ロゴス〔言葉〕、そして聖霊であり、これら三つは一である」。これが明確に述べていることを、証言は与えてくれているのであり、私たちに神の啓示について気づかせてくれているのであり、それは神を、自らが明らかにしたように、そのように私たちが認識するためである。神は自身について明らかにしている。誰であり、どのような者であるのか。それは真の神、事物の造り主、保護者であり援助者である。そして自身の教えについて、そして私たちに對する意志について明らかにし、天において三であることを断言し、それは証言が宣言したのである。

ゆえに位格を区別する証言が保たれねばならない。こう呼ぶとき、父は自らを明らかにしている。「これは私の愛する子」(マタ三・一七)。同じくヨハネによる福音書一二章。「私はすでに栄光を現した。再び栄光を現そう」(ヨハ一・二八)。子が父について、自身について聖霊について、自らの教えの中で証言している。それを驚異〔奇跡〕と自分自身の復活によって確証したのである。聖霊は区別される。なぜなら独特の像〔姿〕によってキリストと使徒たちの中に注ぎだされているからである。そして後に祈り〔祈願〕、信仰告白、奇跡の中で、耐えねばならない極刑での強さ〔忍耐〕等によって〔それを〕明らかにする。したがってヨハネが証言に言及するのは無駄ではないにせよ、しかしそれゆえに次のように言う。そのように自身を明らかにしたように、私たちに促し、そのように神を認識するように、と。そして〔そうした〕証言そのものを述べることで私たちに元気づけるように、と。

しかし、もし新約聖書の言説がより明確になるにしても、それでもこれらは預言者たちの証言と一致する。ヨエルの言葉において神的な位格が示されている。神がこう言うとき、「私は、すべての肉なる者にわが霊を注ぐ」(ヨエ三・一)。なぜならすなわち、わが、と言うとき、つくられた活動が送られているのではなく、神の本質からの何かを証言しているからである。しかし区別された位格がなければならぬ。それは神の何かであって、それでも父ではない。ところでこの

憐れみはどれほど大きなものか。人類に対するこの愛はどれほど大きなものか。神は、こうした自身と同じ本質である愛の火を注ぎ込んでいるのである。

バシレイオスは多くの証言を集めているが²、それは彼の時代より前に教会で卓越していた作家たちだったのであり、これらに言及することは有益である。というのも真なる確かな証言による教えを、そして純粋な教会に伝えられていることを聞くとき、敬虔な人々は元気づけられるからである。[言うことを] 聞くべき教会については次のように記されている。「私の雌の子牛で耕さなければ、私の謎は解けなかったであろう」(士一四・一八)。

しかし他の中ではカエサレアのエウセビオスによるこの言説を彼は引いている³。聖なる神を、光の創造主を、私たちの救い主イエスを通じて、聖霊と共に助けを求める〔祈願する〕。この言葉は古代の人々が明確に三つの位格を祈りにおいて把握していて、そうした話し方を子について用いているのを明らかにしている。その結果、魂は仲保者による仲裁についてと同時に約束についても注意を促される。これには私たちが信仰告白の中で朗読する証言も関連している。われは聖霊を信ず。すなわち前に述べたように。われは父なる神とイエス・キリストを信ず。こうした話の仕方によって私たちは位格に祈願し、そこから善きものを私たちは得ようとし、助力してくれる神と子への信頼において休息する。ここで次のように言われているときである。われは聖霊を信ず。[ここでは] 位格が理解されていて、私たちはわれわれの心にこの慰めが送られるように、人生における多くの危機の中で私たちを指導し引率してくれるように、願い求めねばならない。ちょうどイザヤ書にあるように、紅海からモーセを連れ出したごとく(イザ六三・一以下)。

ここまで私は位格に関する真の有益な教えを列挙〔検討〕した。そして、なぜなら真の教会の証言は蔑ろにされてはならないと述べたので、敬虔な人々は歴史を読んで知るべきであり、どの公会議でこの教えが誠実に擁護され明らかにされてきたかを見るべきである。アンティオキア〔公会議〕はサモスタのパウロ〔の教え〕を退けた。ニケア〔公会議〕はニケア信条を制定し、とりわけキリストにおける二つの本性についての見解を明らかにした。コンスタンティノポリス〔公会議〕は聖霊が父と子から生じた位格であるというこの条項を擁護した。エフェソス〔公会議〕はネストリウス派を排斥した。ネストリウス派はキリストにおいて二つの本性は一つではなく、ロゴスはキリストの傍らにあると教える。ちょうど友人が友人の傍に立っているように。カルケドン〔公会議〕はエウトュケス派を排斥した。これは本性を混ぜ合わせ、人性が神性に変えられたと捏造した。ち

*2 前掲『聖大バシレイオスの『聖霊論』』、一七三—一八一頁、参照。

*3 同前書、一七六頁、参照。

ようど水から葡萄酒がつくられるとき、二つの本性が一つではなかったように〔しかしそれは葡萄酒つまり神性に変化し今では一つとなった〕。これらは顕著な公会議であり、その判断を私たちは心にとどめて喜んで受け入れるべきである。

これに対して私たちは歴史の中で熱狂者たちがしばしば神の本質に関する真の教えに反して出現してきたことを考察すべきである。マルキオンとマニ教徒は二つの神が、同等に永遠に互いの間で、善と悪との間で争っていると捏造する。そして善を光と呼び、悪を暗闇と呼ぶ。そして善なる本性は善からつくられていて、欠陥のある〔不完全な〕物質は悪からつくられていると述べた。

こうした途方もない行為に反駁することを私たちは学びたい。なぜなら万物の創造主は一つであり確かに善だからである。前に神の定義の中で述べた通りである。そしてイザヤ書四五章ではこう言われている。「私は主、ほかにいない。光を造り、闇を創造し〔身体を創造し、パンを与え悪を創造する者〕、平和を造り、災いを創造する者」（イザ四五・六以下）。つまり邪悪な〔罪ある〕身体である。

私たちはヴァレンティヌス派による暴挙をも追い払うようにしよう。それは数多くの神々もしくは名前を捏造するが、ただ寓意的に積み上げているだけである。ちょうどヘーシオドスが混沌、夜、冥界、サトゥルヌス、ゼウスその他を積み上げ、あるいは経験によって無数の永遠の神がいると信じるようなものである。なぜなら永遠の孤独の中で何か一つだけと考えるのは異様に見えるからである。常に世界の始まりから悪魔はぞっとするような暴挙を撒き散らしたし〔これからも〕撒き散らそうとしている。真の神を侮辱して苦しめ人間の弱さに跳び乗る〔つけこむ〕ためである。そうした暴挙に対して私たちに神は父を通じて、預言者、キリストそして使徒たちによって確かな教えを伝えたのである。〔神は〕この光によって教会が導かれ、決して他の謬見を聞き入れないように欲しているのである。ちょうど赤ん坊が母の胎内の取り囲まれた子宮に座っているように、同じく私たちが神の言葉に囲まれ〔閉じ込められている〕ことを知らねばならない。いわば永遠の生命に生みだされて明白に神を識別するまで。そうではあるが差し当たり私たちは神に感謝しよう。私たちに自らを明らかにされた神に。そして畏敬の念をもってそうした啓示されたものに賛同しよう。

私たちは三つより多く神性の位格はないことを知るべきである。ひとつは私たちの主イエス・キリストと永遠に共存する父であり、ひとつは子、永遠なる父の像であるイエス・キリストであり、ひとつは聖霊であり、そしてこれら三つの位格はそれでも同本質のものであり、同時にすべてのものをつくり、前に列挙したように、私たちはその〔一つであって三つの位格があるという〕区別を知らねばならない。そしてそれぞれの位格の固有の恩恵を理解しなければならない。なぜなら神はそのように自らを明らかにしたからであり、そのように認識されて位格が区別されるのを望んでいるからである。父はすべての恩恵の源泉〔起源〕であ

る。しかし子はとりわけ仲保者であり調停者であり、人性をとり入れたとき、私たちのために犠牲にされたのである。聖霊は信じる者の心に送られている。新しい光、正しい〔義なる〕永遠の生命を点火し〔駆り立てる〕ためであり、ゼカリヤそれをこう呼ぶように、「恵みと嘆願の霊」（ゼカー二・一〇）。つまり、私たちの中で恩恵へと受け入れられていると証言し心を動かしている者を、ここで信じ定めるためである。同じくすでに私たちは聞き届けられているのだと私たちが信じるがゆえに、祈りへと駆り立てる者を〔ここで信じ定めるためである〕。

こうした三つの位格に関する教えは祈りにおいて日ごとに述べられねばならない。その中でこのすべての内で第一のことが確かにもっとも熱心に願い求められねばならない。それは、神が私たちの心を導くように、正しく神について考えるように、そして正しく神に祈る〔願い求める〕ように、異教徒や、近ごろのユダヤ人や、イスラム教徒や、異端者や、マルキオン派や、マニ派や、ヴァレンティヌス派や、サモサタのパウロ派や、アリウス派や、その他の熱狂者のように、決して神から逸脱しないように、ということである。ゆえに何か確かで正しい形式が保たれねばならない。その〔繰り返しの〕朗誦が私たちが真の教えについて気づかせるようであればならない。

万能で、永遠かつ生きている神、私たちの主イエス・キリストの永遠なる父は、あなたに計り知れない善性をもって現れて、私たちの主イエス・キリスト、あなたの子について明言した。「これに聞け」（マコ九・七）。万物の創造者であり、あなたと永遠に共存する子と共に守護者であり援護者、私たちの主イエス・キリストは、あなたと共に支配しエルサレムに現れ、そしてあなたの聖霊は使徒に注ぎだされ、賢く、善く、憐れみ深くそして力強い審判者であり、こう言った。「私は生きている。私は悪しき者の死を決して喜ばない。むしろ、悪しき者がその道から立ち帰って生きることを喜ぶ」（エゼ三三・一一）。そしてこう述べた。「苦難の日には、私に呼びかけよ。私はあなたを助け出し」（詩五〇・一五）。あなたの子であり私たちの主イエス・キリストにより私を憐れみたまえ。あなたは彼が私たちのために犠牲となり仲保者で調停者〔執り成し〕となることを望んだ。そして私の心と魂をあなたの聖霊によって聖化し、導き、助け、駆り立てる〔心に火をつける〕。こうして私はあなたを真に認識するようになり願い求める〔祈る〕ようになる。あなたに真に信頼し、感謝し従うようになる。あなたの教会を導き救いたまえ。約束してこう言ったように、「これが彼らと結ぶ私の契約である。あなたの上にある私の霊、あなたの口に置いた私の言葉は、あなたの口からも、あなたの子孫の口からも、その子孫の子孫の口からも、今より、とこしえに離れることはない」（イザ五九・二一）。常に私たちの中であなたの福音が輝いているように。そしてあなたの聖霊によって私たちの心を導き強めるように。エピクロス派の熱狂者や狂乱者の中で滅びることのないように。教会の熱意を導き、その

住居を提供する政体〔国〕を守ってくれますように。

そうした毎日の祈りの中で私たちは神の本質について、啓示について、恩恵について、約束について考えよう。同時にもちろんこうしたことを考えることで、私たちは位格について教えられ〔教育され〕、信仰は駆り立てられ〔点火され〕、異教徒、ユダヤ人そしてトルコ人から私たちの祈りが分離される。こうしたことはそうあらねばならない。なぜなら、もし〔こうしたことを〕考えて仲保者であるキリストへの信頼が生まれえないような祈りであるなら、決して神には喜ばれない〔気に入られない〕からである。こう記されているように、「あなたがたが私の名によって願うなら」（つまり、私によって呼ぶことで、私によって仲保者を明らかにすることで）「父は何でも与えてくださる」（ヨハ一六・二三）。同じく、「私を通らなければ、誰も父のもとに行くことができない」（ヨハ一四・六）。ところで福音の中に伝えられているこうした真の祈りが無駄ではないことを私たちは経験するであろう。

そして精神と目は明白に明らかにされた証言、つまりキリストの洗礼、死からのキリストの蘇り、復活後に親しく交わり自らを多くの人々に示したこと、聖霊を送ったといったことを、熟考すべきである。それゆえにこうした目に見える証言が示されているのだが、それは教会を教え強めるためであり、なぜ示されているのかというと、神はそれが注視されて考察されるのを望んでいるからである。単に〔ヨハネによる〕洗礼のゆえにそのとき神性が自らを明らかにしたのではなく、この証言によって神はすべての教会がその時代そして未来も強められるのを欲したのである。それどころか天使もそうした驚くべき神の見ものを、その隠れ場から現れて自らをその教会に明らかにする光景を教えている。こうした証言を私たちが考えるとき、心の中の光は点火され〔燃え立たされ〕て、確かに神は存在し、私たちの祈りを受け入れてくれ、約束したように助けてくれることを、より強く決心するようになる。なぜなら、こうした信仰が祈りに付け加えられねばならないからである。もう一度敬虔に仲保者に向けられたこうした形式を私たちは用いよう。これは三つの位格をも包含している。

イエス・キリストよ、生ける神の子よ、私たちのために十字架につけられ蘇られた方、人間に贈り物を与え、私たちのために執り成しとなって据えられるために、神の右にて支配される方、私を憐れみあなたの永遠の父のところで私のために執り成し、あなたの聖霊で私を聖化したまえ、約束してこう述べるように、「私は、あなたがたをみなしごにはしておかない」等（ヨハ一四・一八）。

この形式を私たちは敬虔に用いる。聖霊よ、神の子が、私たちの贖い主が、私たちのために約束した使徒たちに注ぎだされた聖霊よ、私たちの中に真の認識と神への祈りを燃え立たせるために注ぎだされた聖霊よ、こう記されているように、「私は恵みと嘆願の霊を注ぐ」（ゼカ一二・一〇）。私たちの心の中に神への真の

畏れと真の信仰と憐れみの認識を生じさせよ。これらは私たちに、われらの主イエス・キリストの永遠の父が子のゆえに約束したのであり、あらゆる思慮〔忠告〕や危険において私たちにとって擁護者〔聖霊〕であり、私たちの精神を燃え立たせる。こうして真の服従をもって主イエス・キリストの父とその子を、私たちの救い主を、そしてあなた〔聖霊〕を永遠に賛美するのである。

このようにして祈りの中で位格と恩恵について考えるなら、精神は学識〔教養〕においても敬虔においても前進するはずである。さらに熱心に研究する者たちは、すべての位格の能力や特性の名称が共通であることを知るべきである。すなわち、知恵、善性、義〔正しさ〕、憐れみ、勇敢、清浄という名である。これらの特性はその本質から決して区別されるものではない。ちょうど父の能力は父、父の義は父、子の義は子というように。そしてこうした名〔名称〕が預言者たちの書物の中でどのように用いられているのか、考察されねばならないし、厳密に正しく語るように細心の注意が払われねばならないのである。

(次に続く)

謝辞

本研究は JSPS 科研費 JP 22K00110 の助成を受けたものです。

(ひしかり てるお・教授)